高知県立文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
vol. 107
2024.12

リレー随筆

私と義堂・絶海

朝倉（あさくら） 和（ひとし）

私が義堂周信〔一三二五～八八〕と絶海中津〔一三三六～一四〇五〕を初めて意識したのは、高校の日本史の授業で、教科書に彼らの名前が出てきた時です。当時、先生が「禅僧の名前は、一休さんが「一休宗純」であるように、四文字なんだよ」と言っていたのをよく覚えています。その後、研究者だった父の影響もあり、大学、大学院と進み、絶海中津を研究対象としたのは、五山文学研究のパイオニア的存在であり、私の名前・和の名付け親でもある恩師・中川徳之助先生（広島大学名誉教授）にすすめられたからです。中川先生が私のどこに着目して絶海をすすめてくださったのか、亡くなられた今となっては知る由もありませんが、戦後まもなく高知の農業学校で教鞭を執られていたことも、何らかの関係があるかも知れません。

義堂・絶海は、大変奇遇なことに、ともに高知県津野町出身、夢窓疎石門下で、「五山文学の双璧」と並称されています。「五山文学」とは、鎌倉・室町時代に五山派の禅僧によって作成された漢詩文や、漢籍の注釈を核とする文学・学問活動を指し、その研究状況は、文学の分野においては「傍流の文学」「学界の孤児」と敬遠される嫌いがあり、低調と言っても過言ではありません。義堂と絶海を一括りにして、五山文学の代表者のように評価しているのは、実のところ、江村北海〔一七一三～八八〕の『日本詩史』巻之二に「五山の作者、その名今に徴すべきもの、百人に下らず。しかして絶海、義堂、その選なり」と記されていることに起因し、未だにその発言の影響力が大きいように思われます。

今回、僭越ながら高知県立文学館で開催される「漢詩文を楽しむ五山文学展」の監修を務めさせていただくことになり、身に余る光栄を感じております。と同時に、義堂・絶海の出身地である高知の方々と交流し、様々な教えを乞うことで、彼らの漢詩文に新たな魅力を発見したいとも思っています。この義堂・絶海を通して、高知県に貢献することこそが、実は中川先生がお望みだったことかも知れません。

（広島商船高等専門学校　教授）

五山文学研究者である父・朝倉尚（中央）、弟・太田亨（広島大学／左）と共に、筆者が津野町を訪れた時のもの

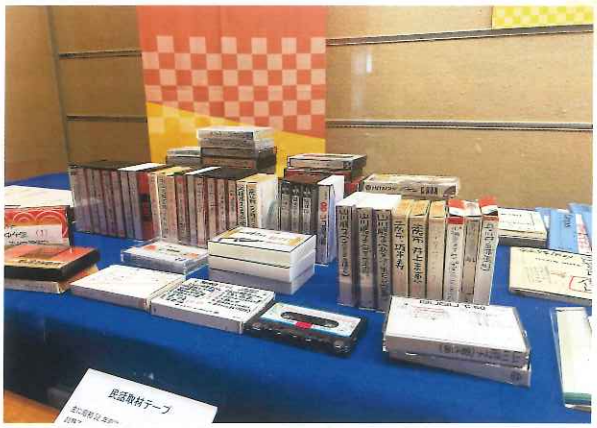
企画展

追悼 市原麟一郎先生 ～土佐民話よ、永遠に～

レポート

現在開催中の「追悼 市原麟一郎先生～土佐民話よ、永遠に～」では、市原先生が県内各地をくまなく回り、土佐民話を採集・記録したカセットテープや取材メモなどの貴重な資料を展示しており、民俗学研究の方面からも注目を集めています。

当館に収蔵している市原先生収集の採話テープには、「土佐民話」「高知大空襲」「引揚体験記録」「抑留体験記録」「南海大地震の記録」等があり、そのうち、「土佐民話」を収めたものには「山爺は一つ目」「蛙女房」（昭和52年10月／旧鏡村）、「天狗と勝負した男」「姥御前」（同年12月／旧本川村越里門）など、主に昭和52、53年頃に採話したものが83本あります。



昭和52、3年頃の採話テープの数々

当館では採話テープのデジタル化に取組み始め、展示室ではその一部を聞くことができます。また、約15年ほど前に当館で開催した紙芝居の演じ方講座の映像も放映し、在りし日の市原先生のお話をお聞きいただくこともできます。

今回の展示で特に力を入れて制作したのが、「民話のふるさと」コーナーに設置した横幅約6mの巨大な高知県ジオラマ。ゼンリンの地図を使用し、等高線を100mピッチ、20段で表現した本格的なものです。

このジオラマに、市原先生が採集し、書籍として記録した民話の中から約200作を選び、それぞれの話の地元に旗印をつけました。民話の分布とともに、市原先生のお仕事が一目でわかる展示となりました。

旗印には「蛇」「渕」「山犬」など、話のキーワードをマークとしてつけ、どんな内容の話がどこに伝わっているかがわかるよう工夫しました。

展示解説などでお客様をご案内すると、一つ一つの旗を確かめながら、「この渕の話は祖母から聞いたことがある」「金太郎の力石の話ははじめて知った」「市原先生が県内すべてを回り、これだけの話を集めたことに驚いた」など、熱心に語りあいながら展示をご覧いただいています。

「追悼 市原麟一郎先生～土佐民話よ、永遠に～」は令和7年1月5日（日）まで開催しております。土佐民話の豊かさ・面白さに触れに、ぜひ文学館にお越しください。

（学芸課／岡本美和）

入口正面には市原先生の色紙が並ぶ

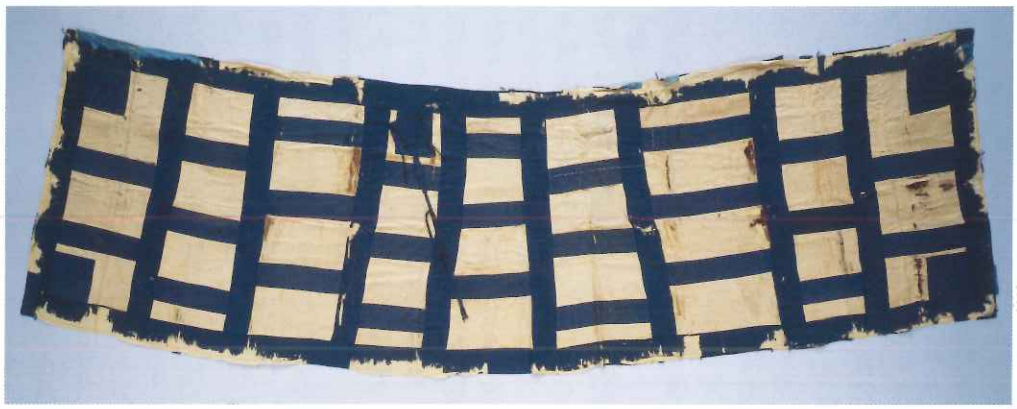
回次開催

五山文学展もうすぐです！

令和七年は、土佐の五台山に吸江庵をひらいた伊勢出身の夢窓疎石の生誕750年、その弟子で土佐の津野出身とされる義堂周信生誕700年という記念の年です。

鎌倉から室町時代に、臨済宗を中心とした禅僧たちが作った漢詩文を五山文学といいます。中国・宋の五山十刹制度にならって鎌倉と京都に五大寺を構えたことから、そう称されました。

吸江寺文書（南北朝～江戸時代／吸江寺蔵／高知県立歴史民俗資料館寄託）



夢窓から絶海に伝わった九条袈裟（南北朝時代／吸江寺蔵／高知県立歴史民俗資料館寄託）

そして、夢窓の教えを受け、のちに五山文学の双璧となった弟子が、土佐の津野出身の義堂と絶海中津の二人です。

当館では、夢窓、義堂、絶海の三人に焦点をあて、この記念の年の新春より、五山文学の展覧会「いなかずまいは至極無事ぢゃ～漢詩文を楽しむ五山文学展～」を開催します。

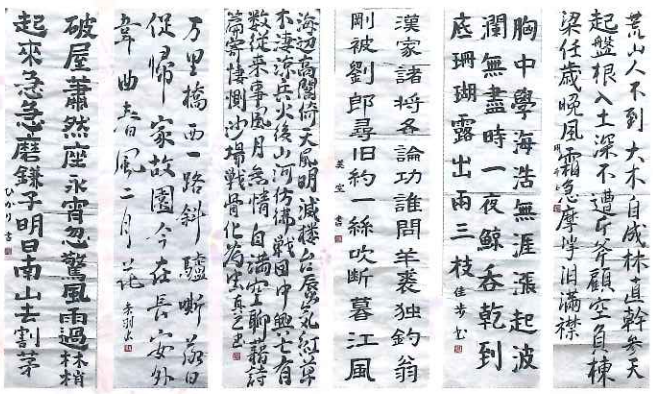
展示では、吸江寺に伝わる貴重な品々の他、中世の津野町の様子がうかがえる発掘品、梼原町に残された夢窓のゆかりの品を見ることができます。長い間、土佐で大切に伝えられてきた貴重な品々をぜひ見ていただきたいです。

もうひとつご紹介したいのは、漢詩や漢文、和歌などの五山文学の作品です。これらの五山文学の漢詩は、禅の故事などを踏まえたむずかしいものもありますが、戦乱の南北朝時代に僧という立場だったからこそ詠める作品があり、ふるさと土佐を想う詩があり、また義堂と絶海の親しい交流がうかがえる漢詩があり、どれも非常に素晴らしくて、ぜひ皆様に読んでいただきたいものばかりです。

今回、そうしたおすすめの漢詩や和歌を県内の高校生に書道で書いていただき、展示します。瑞々しい書とともに、はるかな時を超えて残された彼らの作品を味わうことができます。

むずかしい？　でも、知らないなんてもったいない！　ゆるりとたのしむ禅と文学の展覧会、令和7年1月18日より開催です。皆さまのお越しを、心よりお待ちしております。

（学芸課／川島禎子）



上の書は高知県立高知追手前高校の皆さん

閉幕

会期
2024年7月6日(土)～
9月16日(月・祝)

©月刊ムー

スーパーミステリー・マガジン「ムー」の創刊45周年を記念し、「アヤシイもの好き」の文学者紹介も絡め多角的に世界の謎と不思議にせまった展覧会【創刊45周年記念 ムー展～謎と不思議に挑む夏～】が9月16日(月・祝)に閉幕しました。

前回の館報でご案内した通り、宇宙・古代遺跡・UMA・超常現象などコーナーに分けて「ムー」に掲載された45本の記事を紹介。文学館らしくムーの"言葉"にも着目し、書籍・フィギュアを中心に約200点の資料を展示しました。

印象的だったのが、お客様の世代の広さです。夏の企画展は主に家族で来館いただくことが多いのですが、生粋のムーファンはもとより、展示をひとり静かに鑑賞する年配の方や、ダウジングやメタバース体験を友達とワイワイ楽しむ学生グループなども目立ちました。お客様からは「言語表現の妙を感じます。編集方針の一貫性が素晴らしい」、「わくわくと不思議をありがとう！」といった嬉しい声が多く寄せられ、「謎と不思議」には様々な楽しみ方があることを教わりました。

「ムー」は単なるオカルト雑誌ではなく、ライター諸氏の綿密な調査・研究に基づいた考察を魅力的な図版と豊かな"言葉"で構成しており、知的好奇心を刺激し続ける雑誌です。その不思議への探求心は、これからも私たちに驚きと想像(創造)を誘起させてくれることでしょう。

展示にあたり「ムー」の魅力を惜しみなく提供してくれた望月哲史webムー編集長、三上丈晴編集長をはじめワン・パブリッシングの皆様、斎藤英喜先生、ゼクサバース様、展示にご協力くださった関係者の皆様、そして来館者の皆様に心より御礼申し上げます。

(学芸課／福冨陽子)

常設展企画コーナー

今こそ平安文学に触れてみませんか

常設展企画コーナー「平安文学の世界―紫式部と女性たち―」が一部展示替えをしながら開催中です。紫式部が記したとされる文学3作品(『源氏物語』『紫式部日記』『紫式部集』)や『土佐日記』など、平安時代の日記文学作品を紹介しています。

主人公が紫式部ということで注目を集めてきたNHK大河ドラマ「光る君へ」も、最終回が近づいてきているようです。企画コーナーの会期も残り4か月ほどとなりました。

今年の4月から展示を行っていますが、8月末から9月初めにかけて「光る君へ」の全国巡回展が高知県立文学館で開催されたことで多くの方が文学館を訪れ、展示をご覧いただくことができました。展示資料の中でも、原寸完全原色の複製「源氏物語絵巻」は目を引きます。3回にわたり現代語訳を遂げた谷崎潤一郎も、監修に携わっています。現物は徳川美術館と五島美術館が所蔵しており、日本でも一級の美術品です。

その他『源氏物語』の注釈書や現代語訳を行った作家の書籍などを紹介しています。展示する機会の少ない資料ですので、この機会にぜひ見ていただきたいです。

古典は難解でとりつきにくいイメージがあるかもしれませんが、近年はわかりやすい解説本や映像作品など、入り口がたくさんあります。今回の展示もそんな入り口のひとつにしていただければと思っています。気軽に平安文学の世界をのぞいてみませんか？展示は3月23日(日)までです。

来年度の常設展企画コーナーは、宿毛市出身の歌人である北見志保子に関連する展示を予定しています。詳細は追ってお知らせしますので、文学館のホームページや館報をぜひご覧ください。

(学芸課／笠岡花菜子)

106

土佐文学さんぽ

戦後の奇才・マンガ家 川島三郎

谷 是（ただし）

”川島三郎“と言っても今や知らない人が多いであろう。戦後、高知で一世を風靡（ふうび）したマンガ家である。明治43年3月土佐郡朝倉村（当時）に生まれた。父は、正件といい、高知市の助役や市長を長く務めた市政功労者であり、知られた存在。当人は県立城東中学校（追手前高）や高知師範学校を出て、伊野小や高岡小学校の教壇に立つ。戦後、映画館の支配人から「夕刊高知日報」（社長野村茂久馬）に入り、四コママンガ「コウちゃん」「しばてん」を連載。県内ニュースをすぐマンガにして、貧困と失意にあえぐ庶民に、笑いと励ましを与えた。洒落（しゃれ）の名人で、その素早いマンガ化は、紙面に潤いを与え、ウィットに富み”傑作“の連続であった。

例えば、毎夜のように菜園場で火事があり、「また火事か」と言いながらシバテンがその方向に「気はこころ」と言いながら、前を開いて放尿したり、天皇陛下全国巡行のとき「あそこが吾桑（須崎市）です」という言葉に「あ、そう」と昭和天皇の口ぐせを使ったり、上町五丁目の道路の拡張問題で、住民がムシロ旗を立てて陳情したとき「市長は出張しておりません」という返事に「俺達は市長より一町偉い五丁目だ」と言わしたりした。やがて新聞は高知新聞と統合されたが、”マンガ教室“などを高知新聞紙上に開設、平山昌幸などと、選者指導を担当、多くのマンガ家を育成した。はらたいら、青柳祐介、黒鉄ヒロシなどである。退職後は優れた肖像彫刻家として、県内方々の彫刻を作った。東津野村の吉村虎太郎などは、息子である濱田浩造などを手伝わして造った。また、写真を各方面から組み合わせて立体にできる方法を発見。キタムラカメラに事務局を置いて作像したり、実兄の川島ラジオ店の中で「自動テープ・巻き取りリール」などを研究開発し（今のオートリバース）はりまや人形や闘犬の一刀彫りを造り、その商品化をしたり、養殖魚の研究をして、その方面の開発をするなど、知才を各方面に働かし、身辺を飾らず、奔放磊落にして発明、工夫にその才を発揮した。当時としては抜きん出た才能で、その才は広く知られていたが、昭和46年1月60歳で死去。父の遺志を受け、息子濱田浩造が土佐の偉人を型に残そうと仕事を継いで、岩崎弥太郎、浜口雄幸、ジョン万次郎、義堂・絶海などの作品を残した。

（郷土史家）

川島三郎　似顔絵（画／谷 是）

資料受贈報告

寄贈資料から

『日本民話 土佐のお化け昔』
市原麟一郎著　講談社刊
昭和50（1975）年4月
四六判　277頁
味元敬子氏寄贈

今回ご紹介する『日本民話 土佐のお化け昔』のまえがきは、晩秋の雨夜、著者のもとへほろ酔い機嫌の声でかかってきた一本の電話から始まります。「市原さんかよ。あしゃあ、おまさんのファンで、おまさんが書いた本は、必ず買うて読みよるが、まだ一ぺんもハチスの狸の話がのらんが、ちっと片手落ちじゃないかよ。今度、出す時は絶対、入れちょいとおせよ、ええのう」（まえがきより引用）

どこか土佐民話に登場するおどけ者を思わせるような読者からの電話。数多くの陽気で明るい民話が生まれ、語り継がれてきた土佐の風土がうかがわれるとともに、土佐民話の第一人者、市原麟一郎さんがいかに県民に親しまれる存在であったかを物語るエピソードであるように思います。

市原さんには数々の著書がありますが、本書は妖怪の話を中心とした「お化け昔」、笑い話を集めた「笑い昔」、その他の昔話「いろいろ昔」の3部構成で、既刊の自著では未発表の108話を収録。えんこうやシバテンといった妖怪、ひょうきんな頓智ものの泰作さん、忍術使いの茂平など、土佐民話の代表格にまつわる話はもとより、まえがきの電話の主の熱望に応え「八洲の狸」も収められています。全篇にわたっていきいきと飛び交う土佐弁に、在りし日の祖父母らの話しぶりを思い出し、懐かしさを覚えます。

本書収録の民話の多くは、昭和46（1971）年に市原さんの呼びかけで創立された「土佐民話の会」の機関誌「土佐の民話」からの収載。市原さんはあとがきで、本書の刊行は会員一同の協力があっての事と感謝を述べ、刊行により「全国のたくさんの人たちに読んで戴（だ）けるようになった事を、会員のみなさんと共に、心から喜びたい」と結んでいます。

（学芸課／小松路代）

受贈報告

（令和6年8月～10月）敬称略

▼竹崎邦博・「寺田東一写真」他
▼柴田ケイコ・「パンどろぼうとりんごかめん
柴田ケイコ作　KADOKAWA刊」
▼常光 徹・「紙芝居 うらしまたろう 脚本：
常光 徹 絵：西村繁男 童心社刊」
▼木村哲也・「詩集 いのちの芽 大江満雄編
岩波書店刊」
▼湯浅篤志・「森下雨村犯罪実話集 森下雨村
著 湯浅篤志編 ヒラヤマ探偵文庫刊」
▼幻冬舎・「夜しか泳げなかった 古矢永塔
子著 幻冬舎刊」
▼味元昭次・「とうすみ 柳井眞路句集 柳井
眞路著刊」
▼松林朝蒼・「句集 水声山色 松林朝蒼著
文學の森刊」
▼『新青年』研究会・「『新青年』趣味 24号
『新青年』趣味編集委員会編刊」
▼ワン・パブリッシング・「ムー525号 廣瀬
有二編 ワン・パブリッシング刊」
▼窮理舎・「窮理 26号 伊崎修通編 窮理
舎刊」
▼高知県の学校資料を考える会事務局・「高
知から考える学校資料の継承 高知県の
学校資料を考える会編刊」
▼野村土佐夫・「新説・山北村の言伝えを収録
編集 乙女・龍馬の山北・安田紀行など三話
昔話シリーズ№1 野村土佐夫著
▼野村裕刊」他
▼石井耕・「石井立が遺したもの－編集者とし
ての喜びは《できるかぎりよき本》をつくる
ことー 三鷹市スポーツと文化財団編刊」
▼秋元千恵子・「ぱにあ 116号 短歌会
ぱにあ編刊」

第8回 お城下ネット お城下文化の日

レポート

高知市中心部にある文化施設が連携した「高知お城下文化施設の会（お城下ネット）」では、毎年11月に「文化」をキーワードに合同イベント「お城下文化の日」を開催しています。

今年は11月17日(日)に開催。同日開催の「国際ふれあい広場」「高知ベトナム交流会」ともコラボし、3つの会場をめぐって楽しむスタンプラリーが実施されました。

当館も帯屋町二丁目アーケード内で「オリジナル民話キャラ缶バッジを作ろう！」のワークショップを展開。好評開催中の企画展の紹介も兼ね、参加者の皆さんに「たぬき」や「えんこう」など、土佐ならではの民話キャラを思い思いに描いていただきました。世界で一つだけのオリジナル缶バッジがその場で生まれる様子に、小さな子どもはもちろん、大人も大変喜んでくださり「こんな催しがあるなんて、今日はお出かけして正解やった！展示も観に行きます」など好評の声をいただくことが出来ました。

あわせて、歴史と文学を題材に高知城周辺をめぐる「お城下まちあるき」も実施。当館から徒歩圏内にあるエリアには、鹿持雅澄愛妻の碑（高知城階段付近）や植木枝盛邸跡（城西公園付近）、寺田寅彦記念館（小津町）をはじめ句碑や詩碑などが多く点在しています。今回は江ノ口川周辺を中心にゆったり散策しつつ、地域の魅力を再発見できる良い機会となりました。

毎回準備は大変ですが、参加者の皆さんだけではなく他館との連携・交流も出来て有意義な「お城下文化の日」。来年も11月に開催予定ですので、ぜひご注目ください。

（学芸課／福冨陽子）

お城下まちあるきの様子

缶バッジ作りの様子

第27回

児童生徒文学作品朗読コンクール 県審査・記念講演会

朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいという思いから、文学館では、毎年児童生徒文学作品朗読コンクールを実施しており、本年度で27回を迎えました。

11月10日(日)の県審査には、西部・東部・高知の各地区審査を通過した22名の小・中学生が出場しました。文学館のホールは大勢の観客の方でいっぱいとなり、発表した小・中学生の皆さんは緊張したことと思いますが、心を込めた朗読からは自分の思いを伝えようとするひたむきさが伝わってきました。

小学校4年生までは2分以内、5年生以上中学生は3分以内と、朗読時間が限られている中で、間の取り方や声の出し方を工夫し、作品の世界をしっかりと解釈し、聞き手に伝える工夫がされていました。

また、今年のコンクールでは、特別審査員にRKC高知放送キャスターの井手上恵さんをお迎えし、「声と言葉の選び方～気持ちを伝え、気持ちを引き出す～」という演題でご講演いただきました。私たちは気持ちで言葉を自然に選んでいること、表情は声や言葉に自然と釣られること、気持ちを伝えるときは、思いやりの気持ちで相手が受け取りやすい声と言葉を選ぶこと、など、会場の出場者とやりとりしながら、実演を交えてのお話でした。会場が一体になり、表現することの魅力を改めて感じるとても豊かな時間となりました。

最後になりましたが、参加してくださった児童生徒の皆さんをはじめ、保護者の皆様、学校関係者の皆様、関係各所の皆様のご協力を得て、朗読コンクールが開催できましたことを、心から感謝申し上げます。

（学芸課長／織田敦子）

県審査の様子

審査結果は以下のとおりです。（敬称略）

金賞
高知大学教育学部附属中学校
2学年　門田（かどた）　麻汐（ましお）

特別賞
井手上 恵賞
四万十町立田野々小学校
5学年　佐藤（さとう）　さち

高知県教育長賞
土佐中学校
3学年　濱田（はまだ）　花音（かのん）

銀賞
高知大学教育学部附属小学校
4学年　五百藏（いおろい）　慈世（ちかよ）

高知大学教育学部附属小学校
6学年　筒井（つつい）　心愛（ここあ）

郷土文学賞
高知市立朝倉小学校
4学年　篠原（しのはら）　陽斗（はると）

銅賞
黒潮町立南郷小学校
4学年　大西（おおにし）　将仁（まさひと）

高知市立一ツ橋小学校
5学年　田村（たむら）　奏歩（かなほ）

高知市立横内小学校
6学年　岡林（おかばやし）　もも

黒潮町立南郷小学校
6学年　武政（たけまさ）　優花（ゆうか）

高知大学教育学部附属中学校
3学年　岡部（おかべ）　麗桜（りお）

※上記のほか、11名の方が入賞されました。

ショップより

冬の訪れと共に、師走の慌ただしさとクリスマスの華やかさが入り混じる頃となりました。

文学館では、10月5日より「追悼 市原麟一郎先生～土佐民話よ、永遠に～」を開催しており、ミュージアムショップには、書店ではなかなか目にすることがない市原麟一郎編の書籍『土佐の民話』と『昔まっこう猿まっこう』を取り扱っております。

また、当館において常時売れ続けています『高知のパワースポットごりやくめぐり』含め、むかしばなしの絵本や民話・妖怪といった関連書籍も取り揃えています。

そして、『土佐化け物絵本』に描かれているオリジナルグッズのポストカード（黒坊主・ぼたもち・けち火・船幽霊）とクリアファイル（天狗・黒坊主・船幽霊）は、「創刊 45周年記念ムー展～謎と不思議に挑む夏～」より引き続き大変ご好評頂いております。

当館にお越しの際はミュージアムショップにもお立ち寄り頂き、ぜひお手にとってご覧ください。

（総務事業課／海治紫野）

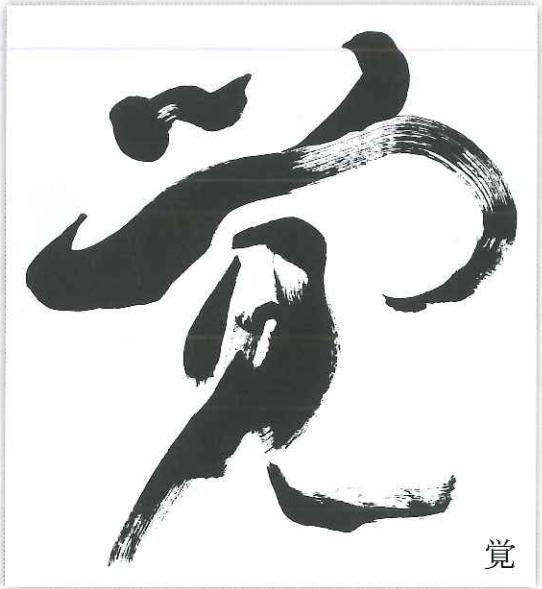
館長エッセイ

澤田博睦

本が面白いと思うようになったのはいつ頃だったでしょう。大家族でしたが、昼間は皆出かけており、いつも曾祖母が保育園帰りの私に絵本を読み聞かせてくれました。

最初、言葉がわからず、絵にも全く興味のなかった私は、退屈で曾祖母の周りをぐるぐる動き回っていましたが、それでも曾祖母は、辛抱強く読んでくれたものでした。今になって、ありがたみがわかります。

ある時、いつもの様に全く落ち着かないまま、絵本を聞くとはなしに聞いていると、急に、わかることばが頭に飛び込んで来ました。それまで何度となく聞いていた筈なのに、初めて聞いたような衝撃でした。俄然興味が湧いて、曾祖母と絵本の隙間にずびこんで（入り込んで）聴いてみると、お話が耳に入ります。絵に描かれた情景が目の前に広がります。それからは、曾祖母に何度も読み返してもらいました。お気に入りの絵本はお魚が活躍する本だったか、今となってはよく思い出せません。ただ、早く自分で読めるようになりたい！と思ったことは、鮮明に覚えています。



覚

「4、5歳の頃に聞いた話は一生胸に残っている」とは、市原麟一郎先生が県内を取材する中で語られたご老人の言。そうして伝承された土佐民話の数々。出張おはなしキャラバンでは、市原先生が残してくれた紙芝居が大活躍です。次の世代に伝えたい熱い思いと土佐民話。今回の「追悼 市原麟一郎先生～土佐民話よ、永遠に～」では、高知県立高知農業高等学校森林総合科の協力を得てできあがった高知県のジオラマに、一つ一つマッピングされた民話の数や雑誌に掲載された膨大なタイトル一覧を見て、市原先生の偉業を改めて実感しました。

そして次は、高知が生んだ五山文学の立役者、義堂周信と絶海中津に出会える「いなかずまいは至極無事ぢゃ～漢詩文をたのしむ五山文学展～」です。近隣の高校書道部の皆さんにもご協力いただき、書とともに先人の文学に迫ります。お楽しみに。

高知県立文学館ニュース　第107号　令和6年12月2日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX 088-871-7857

高知県立文学館カレンダー

12月27日～1月1日は年末年始のため休館します

追悼　市原麟一郎先生
～土佐民話よ、永遠に～

好評開催中

- 会　期　令和6年10月5日(土)≫令和7年1月5日(日)
- 開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日　年末年始（12月27日～1月1日）
- 場　所　2階 企画展示室
- 観覧料　500円（常設展含む）長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

撮影：渡辺　裕二氏

展覧会の紹介をしています！詳しくは2ページ目をご覧ください。

次回開催

いなかずまいは至極無事ぢゃ
漢詩文を楽しむ五山文学展

- 会　期　令和7年1月18日(土)≫3月23日(日)
- 開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日　会期中無休
- 場　所　2階 企画展示室
- 観覧料　500円（常設展含む）長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは3ページ目をご覧ください。

＼多彩な関連イベントも開催！／

記念講演会
▶「義堂周信と絶海中津 ― 人と作品とその周辺 ―」

五山文学研究者の朝倉先生に、その魅力についてお話しいただきます

- 講　師：朝倉　和（ひとし）氏（広島商船高等専門学校　教授）
- 日　時：令和7年3月2日（日）午後2時～3時半
- 場　所：文学館1階ホール
- 参加費：要当日観覧券
- 申　込：電話または当館受付（定員100名）

ほか、文学散歩や朗読の会を予定しています！

▶お話と写漢詩体験

お話と写漢詩で、心穏やかな一日を

- 日　時：令和7年1月26日（日）午後2時～4時
- お話：五台山吸江寺住職　小林玄徹氏
- 書道指導：楠瀬美保氏　● 表装：浮月
- 場　所：高知県立文学館1階ホール
- 参加費：要当日観覧券　● 申込：先着各30名

▶世界は広がる　漢詩を学ぼう

漢詩の基本を学び、柏梁体（漢詩の1行め）を作ろう

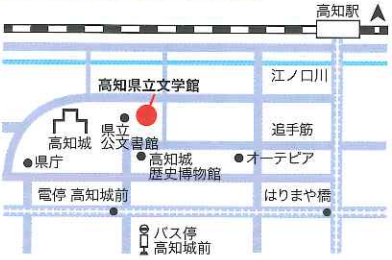
- 講　師：上本竹永氏（高知県漢詩連盟会長）
- 日　時：令和7年2月9日（日）午後1時～4時
- 場　所：高知県立文学館1階ホール
- 参加費：要当日観覧券　● 申込：先着30名

高知県立文学館で開催する企画展・その他事業は職員全員で消毒・清掃を行い、安心・安全に利用いただけるよう感染予防・拡大防止対策を行っております。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日	年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休 ※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
観覧料	常設展一般370円　企画展はそれぞれ異なります。 20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。 身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。 （窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります）
駐車場	なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室
運営	公益財団法人　高知県文化財団

交通のご案内



- JR高知駅から徒歩20分（またはバス・路面電車を利用）
- バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- 高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」下車、徒歩20分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
高知県立文学館　検索